



第3回JIU学生映画祭課題シナリオ ～タイムカプセルインク～

『告白』

『ディスカッション』

『さよなら』

課題内容

近未来、直径5センチのカプセルを過去の自分に送れるサービスが生まれた。未来の自分からカプセルを送られてきた人々を巡る、それぞれの物語。

応募者は、『告白』『ディスカッション』『さよなら』の3つのストーリーから、1つを選択し映像化する。ストーリーは途中までしか書かれていないので、その後は、各自オリジナルで描くこと。

《課題 マニキュア (例)》

.....

ある日、東京に住むネイリストのミキのもとへ小さなカプセルが届けられた。

カプセルの中には、『マニキュアの瓶』と小さな紙。

紙には、『タイムカプセルインク』のマークと、

『これは2045年3月23日に生きる貴女が、

2014年9月3日の貴女への送った品物です』

という文章。

誰の冗談か、と本気に思わないミキだが、その日、田舎の母が倒れたと聞く。

病院に駆けつけるが、すでに母は亡くなっていた。

久々に会った母は、老いて小さくなり、手は、かさついていた。

自分が東京へ出て、ネイリストの学校に通っている間、

ずっと仕送りをしてもらっていた母。

そのとき、ミキはあのカプセルを思い出す。

未来の自分から送られたマニキュアを取り出し、

死んだ母の爪に色を塗るのだった。

.....

といった内容のストーリーを考え、15分以内の短編映画を制作する。

告白

○黒味

テロップ（文字）

『西暦2045年 物質を別空間に移動させるテレポーション、別時間に転送するタイムスリップ、双方の技術が実用レベルに達し、新たなビジネスが生まれた』

○テレビ画面

テレビ画面に『タイムカプセルインク』という社名ロゴが映っている。

画面が切り替わり、白衣を着た男性が、手に小さな5センチほどの透明なカプセルを持っている。

男性「（笑顔でカメラ目線）みなさん、ご覧ください、これが我が社の開発したタイムカプセル、その名もクロノス。この直径5センチのカプセルの中へ、入れる物であれば、どんな物でも誰にでもプレゼントすることが出来ます……（なにか質問を聞いているような表情）え？そんなの今までだって、当たり前でできたじゃないか、って？いやいや、今まで通りというのであれば、絶対にプレゼントできない人がいたはずなんです。それが誰かって？…（もったいぶった笑顔でためて）……それは…『過去の自分』にです。このタイムカプセルは、過去の自分に、物を届けることができるんです」

○タイトル

『告白』

○大学・教室

誰もいない教室。緊張した様子で、携帯電話を手にして、なにかそわそわと待っている様子の太郎。

すると、そこに電話がかかってきて驚く。

太郎「はひっ！もしもひ！」

マコト「あー、太郎？お前、いまヒマだろ、メシいこうぜ！」

太郎「んだよ！ヒマじゃねーよ、バカ！」

マコト「あー、そうだそうだ、お前今日デートか、ははは、あーそうだ、告白頑張れよー、どうせ無理だろうけどなー」

太郎「うるせえ！」

太郎、電話を切る。

太郎の声「そう、今日、俺は運命の日なのだ。ずっと好きだった、カナコちゃんにデートをして、告白をするのだ」

すると、教室にカナコ（女・20）が入ってくる。

カナコ「あ、ごめんごめん、待った？」

太郎「いやいやいや、ぜんぜん全然、2秒前に来た。ちょうど、ぴったし、2秒」

カナコ「あのさ、ちょっとまだ用事終わらなくて、もうちょっと待てる？」

太郎「あ、うん、俺もなんか手伝おうか？」

カナコ「ほんと？嬉しい。及川先生が次の授業で使う機材運べって、めちゃくちゃ大量にあってさ」

太郎「あははー、及川先生、無茶するもんねー、手伝う手伝う」

カナコが教室を出て、太郎も後を追いかける。

と、そのとき、雷のような音と、光が太郎の背後です。

驚き、振り向く太郎。

すると、コロんと1個のカプセルが床に落ちる。

太郎、不思議そうな顔で、カプセルを拾う。

太郎「なんだこれ？」

透明なカプセルの中には、メモと、線香花火とライター。

太郎、カプセルを開ける。

太郎「線香花火…？」

それから、中のメモを取り出す。

メモには、『タイムカプセルインク』のマークと、

『これは2045年6月24日に生きる貴方が、

2014年9月5日の貴方へ送った品物です』

そして、メモの最後に自筆の文字で

『カナコが嘘をついたときにこれを使え』と書いてある。

太郎「はあ？」

○機材室の前

太郎が、不思議そうな顔で、歩いてくる。

すると、カナコが深刻そうな顔で、機材室から飛び出てくる。

太郎「（カナコを見つけ）あ、ねえ、これ見てよ（カプセルを差し出そうとする）」

しかし、カナコは太郎に気づかず、電話をしている。

カナコ「（電話に向かって）いま、そんなこと言われたって無理だって！」

太郎「…」

カナコ「ちょっと、会って話そうよ」

カナコ、電話を切る。そして、太郎に気づく。

カナコ「あ、ごめん…」

太郎「なんか…あったの？」

カナコ「…ちょっと、待っててもらえる？いま、急用出来ちゃって」

太郎「俺もなんか手伝おうか？」

カナコ「いや…平気」

カナコ、その場を小走りで去っていく。

太郎、カプセルを手に、カナコの後ろ姿を見つめる。

太郎、意を決した表情で、カナコの後をこっそりと追いかける。

(以下オリジナルで制作してください)

ディスカッション

○黒味

テロップ (文字)

『西暦2045年 物質を別空間に移動させるテレポーション、別時間に転送するタイムスリップ、双方の技術が実用レベルに達し、新たなビジネスが生まれた』

○テレビ画面

テレビ画面に『タイムカプセルインク』という社名ロゴが映っている。

画面が切り替わり、白衣を着た男性が、手に小さな5センチほどの透明なカプセルを持っている。

男性「(笑顔でカメラ目線) みなさん、ご覧ください、これが我が社の開発したタイムカプセル、その名もクロノス。この直径5センチのカプセルの中へ、入れる物であれば、どんな物でも誰にでもプレゼントすることが出来ます……(なにか質問を聞いているような表情) え? そんなの今までだって、当たり前でできたじゃないか、って? いやいや、今まで通りというのであれば、絶対にプレゼントできない人がいたはずなんです。それが誰かって? …(もったいぶった笑顔でためて) ……それは…『過去の自分』にです。このタイムカプセルは、過去の自分に、物を届けることができます」

○タイトル

『ディスカッション』

○××会社 控え室前

控え室前のドアの隣に『××会社 新卒面接 控え室』という張り紙。

○同・控え室

控え室にスーツ姿で待っている学生達。

そのなかに、ひときわ緊張している様子の武史(たけし・22)がいる。

お腹のあたりをおさえ、さすっている。

武史の声「子供の頃から緊張するとお腹がゆるくなる…これって一生、治らないんだろうか?」

隣のほうで、ヒソヒソと話す声がする。

男「グループディスカッションって苦手なんだよなー俺」

女「なんかさあ、緊張しすぎちゃってる人いると、やりづらいよね。お前、人の話聞けっ
て感じでさ」

男「あー、いるいる、全然関係ない話しだすやつとかでしょ。連帯責任みたいになるから
なあ」

その声を聞いて、ますます、顔色が悪くなる武史。

そっと立ち上がり、入り口のほうへ。

入り口近くにいた担当者へ声をかける。

武史「すみません、トイレいいですか？」

担当者「あと、10分後にキミのグループが開始になるから、急いで戻ってきてね」

武史「…あ…はい」

○トイレ

鏡の前、げっそりした顔の武史。

水で顔をバシャバシャと洗う。

すると、雷のような音と、光が武史の背後でする。

振り向く武史。視線の先には、小さなカプセルが転がっている。

カプセルを拾って中を開けると、中にはメモとSDカードが入っている。

武史「SDカード？」

メモを見る武史。

『タイムカプセルインク』のマークと、

『これは2047年12月10日に生きる貴方が、
2014年6月11日の貴方へ送った品物です』

そして、その下のほうには自筆の文字がある。

『今日の面接の必勝法がこのSDカードに入っている！
絶対に合格しろ！』

武史「はあ！？…必勝法って」

辺りをキョロキョロする武史。

武史の声「なんでSDカードで送ってくるんだよ！パソコン持ってきてねーよ！」

武史、腕時計を見る。

武史「あと1分で始まっちゃうじゃん！もう、未来の俺、バカすぎるだろ！」

○面接会場

他の学生とともに、武史が室内に入ってくる。

武史「失礼します…」

武史、椅子に座り、あたりをキョロキョロと見る。

室内には、他の学生が5名。

その前に、面接官が3名座っている。

面接官「えー、今日はグループディスカッションを皆さんにやってもらいます。

45分で、こちらから指定した課題を討議してもらい、みなさんで結論を出してもらいます。

そして、10分間で、我々に課題に対する解答をプレゼンしていただきます。

この室内にあるものは、すべて使用して頂いて結構です。

ホワイトボード、紙やペン、そして、プレゼン用にパソコン」

武史、眼が輝く。

武史の声「パソコンあったー！」

面接官「では、討議していただく課題は、『20年後の日本はどうなっていますか？』となります。では、始め！」

(以下オリジナルで制作してください)

さよなら

○黒味

テロップ (文字)

『西暦2045年 物質を別空間に移動させるテレポーション、別時間に転送するタイムスリップ、双方の技術が実用レベルに達し、新たなビジネスが生まれた』

○テレビ画面

テレビ画面に『タイムカプセルインク』という社名ロゴが映っている。

画面が切り替わり、白衣を着た男性が、手に小さな5センチほどの透明なカプセルを持っている。

男性「(笑顔でカメラ目線) みなさん、ご覧ください、これが我が社の開発したタイムカプセル、その名もクロノス。この直径5センチのカプセルの中へ、入れる物であれば、どんな物でも誰にでもプレゼントすることが出来ます……(なにか質問を聞いているような表情) え? そんなの今までだって、当たり前でできたじゃないか、って? いやいや、今まで通りというのであれば、絶対にプレゼントできない人がいたはずなんです。それが誰かって? …(もったいぶった笑顔でためて) ……それは…『過去の自分』にです。このタイムカプセルは、過去の自分に、物を届けることができるんです」

○タイトル

『さよなら』

○マンションの屋上

屋上の手すりから遠くを見つめているマドカ。
手にはリストカット後がいくつもある。

マドカの声「どうせ死ぬなら、キレイに死にたいと思っていた」

手すりから、下を見つめる。
地面は遠い。

マドカの声「ここから飛び降りたら、ぐちゃぐちゃになる。でも、なんか、今日はそれでもいいや、って思えた」

マドカ、柵に足をかけようとする。

すると、そのとき、マドカの背後から、雷のような音と、光。
振り向くマドカ、視線の先には、カプセルが転がっている。

カプセルを拾うと、中には、メモと、折り畳まれた紙。
紙を開くと、そこには、手書きの地図があり、道の最後のほうに、赤い線でxがかかれて『ココに行け』と書いてある。

マドカ「地図？」

そして、メモを見つめる。
『タイムカプセルインク』のマークと、
『これは2049年2月5日に生きる貴方が、
2014年7月29日の貴方へ送った品物です』

その下には自筆の文字で
『キレイに死ぬには最高の場所です』と書かれている。

(以下オリジナルで制作してください)